

モンゴル = チンギスハーンの盛衰

13世紀、朝鮮半島からドナウ川までの、当時の地球上に人の住んでいた地域のおよそ3分の1を席卷したモンゴル軍は、世界でもっとも精強な軍隊だった。その強さの秘訣は、進取の気性に富んだ合理精神にあった。射程 350 ㍎もある投石機、焼夷弾の元祖のような燃えるタール、そして手榴弾や爆弾は、すべて中国やイスラム諸国など非征服先進文明から取り入れ改善したもの。

兵站、通信を完備したこの軍隊に西欧諸軍は惨敗を喫する。明確な指令系統もなく、45キロの重装備の甲冑に縛られたヨーロッパの華の騎士は、モンゴル兵の敵ではなかった。

モンゴルが東西文明交流に果たした役割、宗教にたいする柔軟な姿勢、また西欧で一時は伝説的な東方のキリスト教徒君主プレスター・ジョンと勘違いされ救世主とされていた話もあった。

書店にいけばチンギスハーン（1162～1227）に関するたくさんの本がある。

チンギスハーンのモンゴルは、シルクロードを駆け巡り、ユーラシア大陸を席卷し、遠くキエフやロシアまで侵略した関係で、モンゴルが旧ソ連の従属下にあった時期は、冬の時代だった。“我々の国を侵略したチンギスハーンを英雄視することは許さない”といったところであった。しかし、ソ連崩壊後、チンギスハーンは再び日の目を見るようになった。

しばし、モンゴルとチンギスハーンの世界にひたろう。

モンゴル大帝国の成立

草原の蒼き狼・チンギスハーンがモンゴル部族全体を制覇し、ハーンの位に就いたのは1206年、女真族の「金」の章宗の晩年のことだった。チンギスハーンは金を討つために間断なく征金戦争を仕掛けたが、それは息子のオゴタイ汗に委ねられ、かれは南宋に共同作戦を提案した。金への積年の恨みが先行し、新興のモンゴル族がおそるべき強敵であることの認識を欠いた南宋は、金と結んで遼を滅ぼしたときの苦い教訓を忘れ、これに同意した。モンゴル軍に国都開封を奪われ、国境近くの蔡州に最後の皇帝となる哀宗が逃れてきたところを、宋軍は追撃し、帝は自決して金は9人の帝120年をもって滅亡した。1234年正月であった。ここで宋軍はまた決定的なミスを犯してしまった。淮水を国境線とみなすモンゴル側の意向を無視して開封に進撃してしまった。故都回復の夢を実現し、荒廃した北宋の皇陵を祭って朝廷は狂喜したが、たちまち反撃を受け、手もなく敗退せざるを得なかった。以後約40年間、黄河と淮水にかけての一带は、両軍の不時の戦場と化することになる。

モンゴル族政権である元朝は、1279年世祖フビライ汗が南宋を滅ぼし、全中国を支配するようになってから、90年の国運を保ったが、それ以前になお、太祖チンギスハーンがゴ

ビ砂漠にモンゴル族を統一してから、70年の前史を持っている。「影の外には伴はなく、尾の外に鞭はなし」と表現される孤立無援の境遇から立ち上がったチンギスハーンは、まず矛先を南に向けて西夏を帰服させ、ついで金を攻めて華北を席卷し、燕京から開封への遷都を余儀なくさせた。その後、自ら大軍を率いて西征の途にのぼり、西遼の故領を定め、西アジアに雄視するトルコ系のホラズム王国を滅ぼし、残敵を追ってインド北部に侵入した。別働部隊はカスピ海からコーカサス山脈を越え、ロシア諸侯の軍隊と戦ってこれを撃破した。サマルカンドを中心とする中央アジア領地は次子チャガタイに与えられ、チャガタイ汗国が成立する。

7年に及んだ西征から本拠のカラコルムに帰還したチンギスハーンは西夏を滅ぼし、金を討とうとしたが、病を得て亡くなった。1227年12月のことである。「国を滅ぼすこと40」という彼の世界的征服事業によって、アジアの形勢は一変するが、モンゴル大帝国は子孫に引き継がれ、さらなる膨張を続けていく。

しかも、空前絶後の大帝国建設の第一歩となるこの西征は、意外なところで中国の歴史にも大きな影響を及ぼす。というのは、西征を通じて、モンゴル族は中国を制圧する前に、中国のそれに匹敵する高度の文明が世界各地に存在することを知ってしまったからである。彼らによって、中国の文明はもはや唯一最高のものではなく、いくつもある文明のひとつにすぎず、それに心酔同化される必要はなかった。こうした認識が彼らの中国支配のあり方に影響を与えないはずはない。

チンギスハーンの後継者には第3子オゴタイが選ばれた。太宋オゴタイ汗は遺言に従って金を滅ぼし高麗を服属させたが、その直後から彼の関心はヨーロッパ方面に向けられる。甥のバトゥを総指揮官とする遠征軍はロシアを蹂躪してポーランドに攻め入り、長駆してイタリアに迫ったが、大汗の訃報が伝えられたため、進撃を中止して帰還した。ロシアなどの征服地はバトゥに与えられたが、その国はキプチャク汗国と称した。

オゴタイ汗の死後、一時的に皇后が摂政し、4年後にその子が推戴された。定宋グユク汗であるが、在位3年でなくなった。前例にならって皇后の摂政となったが、有力王侯たちの意見が強く作用して、チンギスハーンの子トウルイの子メンゲが第4代の大汗となった。汗位がオゴタイの子孫からトウルイの子孫へと移ったわけである。憲宋メンゲ汗は次弟フビライを漠南漢地大総督に任じて中国つまり南宋を攻撃させるとともに、三弟フラグに命じて西南アジアを征服させ、ここにバグダードを都とするイル汗国を建設した。かくて、帝国の領土はアフガニスタンからイラン、イラクをへてシリアにまで拡張され、また四川と雲南、チベットからインドシナが平定され、三方を包囲された南宋の運命は、まさに風前の灯であった。

ところが、メンゲ汗が重慶攻撃の軍営で急死したため、モンゴル軍は北帰し、南宋はしばらく余命をつなぐことができた。末弟アリクブハとの汗位争いに勝利したフビライ汗は、間もなく南宋討伐を再開し、ついに目的を達して全中国の支配者となった。ここに中国はその全域を異民族に奪われる未曾有の局面に際会するが、まさに明末清初の学者黄宗義が

「夫れ古今の変は秦に至って一尽し、元に至ってまた一尽せり」と表現した一大異変であった。この日に備えて、都を燕京に遷して大都と称し、中書省を中心とする新政府を組織するとともに、中統の年号をたて、国号を「易経」の文句からとって「大元」とするなど、中華帝国の体裁も徐々に整えられていった。

元朝の中国支配

モンゴル大汗にして中国皇帝となったフビライ汗には、2つの任務が課せられていた。その一つはチンギスハーン以来の征服事業の継承者たることであり、彼は日本、安南、ビルマからジャワに兵を進めて版図の拡大に努めた。他の1つは金と南宋の滅亡を受け、久しく南北に分裂し混乱していた中国社会をまとめ、新しい中国をつくることであるが、その施策が極めて特異な内容をもっていた。たとえば、大都に中書省があって河北、山西、山東の地を直轄し、それ以外には10の行中書省が設けられ、中央と同じくらい広大な地域の行政を担当した。この方針は軍政や観察などの部門にも適用され、一種の連邦制であったとも理解できる。また、各官庁の長官にはモンゴル人が任用される原則を持ち、中央・地方をつうじて厳格に守られた。科挙は実質的には実施されず、官僚はもっぱら下級事務員たる吏員のなかから登用された。

さらに、治下の住民は4類に区分された。首位にモンゴル人がおり、色目人（しきもくじん）、旧金の住民であった漢人、南宋の遺民である南人の順序による民族的区別である。モンゴル人と色目人は総人口の3%にすぎなかったが、特権的に高位高官に任ずる支配階級であり、80%以上を占める南人は蛮子（マンジ）ともよばれて最下層に位置づけられ、「貧は江南に極まり、富は塞北に誇る」と称する厳しい搾取を受けた。色目人はウイグル人など西域からの移住民の総称で、多くはイスラム教徒であり、利に聡い商人であって、財政処理の能力に乏しいモンゴル人に代わり、財政担当者として辣腕を發揮した。

色目人の登用によって、元朝の税制は著しく西方的色彩を帯びていた。戦費捻出のために西域商人による租税の請負制を採用したのは一例であり、土地と財産を主たる課税対象とする両税法をあらため、戸等制と人頭割を併用した独特の税法を実施したほか、銀や生糸を徴収する新法がもっぱら華北で行なわれたのが、その微証である。南宋の旧領には旧来の両税法がそのまま施行されたが、社会的騒乱を恐れての処置であったと考えられる。ただし、負担は南人の方が大分重かった。統一国家の税制としては右のような奇態を生じたが、貨幣政策は南北とも変わることなく、交鈔とよぶ貨幣が一元的に用いられた。後期には濫発によるインフレを招いたとはいえ、利便性の故に交鈔は広大な流通圏をもち、銅銭はわずかな量しか鑄造されなかった。

以上のように、元朝の成立は、中国社会がかつて経験しなかった異質の要素を持ち込んだが、そのもっとも好ましい影響は、宋金の国境が撤廃されて全国的市場が復活したことであろう。市場の拡大と宋代以来の産業の発達を受けて、商業は活発となり社会に好景気をもた

らした。生産力に富む江南と大都を結ぶ輸送路として、大運河は大都まで延長され、江南から天津にいたる海運ルートも開拓され、站赤（ジャムチ）とよぶ駅舎の整備によって、情報の伝達も迅速となった。商業の隆盛は、1328年の商税が1270年のそれに比べ、物価騰貴を差し引いて約6倍に達した事実が、これを証明するだろう。南宋以来の海外貿易も一段と進展し、広州、泉州、明州などの海港場における貿易額は急増した。モンゴル大帝国の存在が商旅の便利と安全を保障したので、世界的規模の通商が可能となった。マルコポーロがシルクロードを経て来朝し、大都で世祖に謁見し滞在したのち、大運河を南下し、泉州から海路帰国したのは、その具体的実例である。

モンゴルの隆盛と衰亡は短い期間だったが、その影響は全世界と現代に通じるほど、はかりしれないものがあった。いずれかの機会に記述したい。

血も涙もあるエリート官僚・耶律楚材

チンギスハーンに登用された名宰相・耶律楚材（（やりつそざい）という人物を知ったのは、陳舜臣さんの『耶律楚材』（上下、1994年刊）であった。

これは面白い“素材”だと思ってむさぼり読んだものである。それにもとづいてご紹介したい。

耶律楚材は、契丹族の皇室の一員として生まれた。耶律楚材の生まれる100年くらい前に、契丹は東から興った女真族の王朝の「金」に滅ぼされた。彼の父親や祖父などは遼の遺民となり、金に仕えた。狩猟生活集団からいきなり大政権に成長した金は、実務官僚が少なかったため、滅亡した遼の契丹族の人材を優遇し、科挙制度を復活して、知識人を懐柔する政策をとった。

ところが歴史は残忍なもので、その金がモンゴルによって滅亡した。耶律楚材は首都の燕京（現在の北京）が陥落すると、その祖先と同じように、今度はモンゴルに仕えた。自分を滅ぼした国に、である。

そのころのモンゴルは、文字もないただの武力集団だった。当時の中国の支配者だった女真族政権・金の外交政策と謀略によって内部抗争ばかりしていたが、そこにチンギスハーンという軍事の天才が現れて、モンゴル族内部の数々の覇権争いに勝利して民族を統一した。しかし、彼は文字が読めなかった。したがって天下を統一しても行政が円滑にできない行政の素人だったのだ。しかも、攻撃と殺戮を旨とするモンゴルの野蛮な草原の掟に対して、耶律楚材が盾となって、それが野蛮であることを教え、文明の方向に向けるべく必死になって尽力したのである。とにかく、侵略に抗した者は皆殺し、降伏したものは奴隷にする、という単純極まりないやり方をする武装集団だった。そこで活用されたのが、金政権や金が滅亡させた南宋（いわゆる文明度の高い漢民族）の官僚群を大量に活用した。その代表格が耶律楚材なのである。彼は『湛然居士（たんねんこじ）集』『西遊録』といったものを書いているので、思想や感情が聞こえるのである。諸葛孔明が書いたものといえ

ば『出師（すいし）の表』しかないのだから・・・。

チンギスハーンが耶律楚材とはじめてあった時、「おまえの国・遼は金に滅ぼされたから、金はおまえにとって代々の復讐の相手ではないか。わしはおまえのために、仇を雪（すす）いでやったのだ。わしにもっと感謝しろ」といったところ、耶律楚材は「私の父祖は金に降り、すでに金の臣となっておりますから、どうして復讐などといえましょうか」と応えたという。それは、“モンゴルが私の仕えていた金を滅ぼしたけれど、私はモンゴルに復讐などしませんよ”という言葉でもあったのだ。もっといえば、耶律楚材のこの言葉は、“私は、勝利者のモンゴルに尻尾を振ってばかりいる人間ではないよ”という、かなり大胆な言葉でもあり、同時に、儒教のモラルとしても強烈なメッセージだったといえる。

チンギスハーンは耶律楚材のこの態度と言葉にいたく感動したようで、その後、一貫して彼を宰相として重用して、いつも自分の身近におき、しかも呼び捨てにしないで、「吾図撤合里」（ウルツサハリ）つまり「長いひげの人」と呼んでいた。若くして立派なひげをたくわえていたのだが、たぶん「超人」の意味も含まれていたのだろう。

耶律楚材の最大の功績は、モンゴル民族の漢民族に対する殺戮をやめさせる努力と、その文明を尊重し守ることにあった。チンギスハーンの息子オゴタイ・ハーンの時代になって、北中国を手にした時、モンゴル族は中国文明に対する敬意をまったく持っていなかったようである。オゴタイ・ハーンの近臣のベチなどは「漢人は国に値しない。ことごとくその者たちを殺して、牧草地となすべし」とさえ進言していたのである。さすがに漢民族を全部殺すことはできないので、たとえば、陳とか李などの姓を名乗るものはすべて殺すとかの議論をしていたのである。それに真っ向から反対したのが耶律楚材である。しかも、反対だけでなく、“漢民族の手で収穫される農作物がどれくらいで、商業上の利益がこれくらい出る。牧草地にして羊を飼うより、ここから農作物の収入を得て税金を取れば、こんなに豊かになる”と。耶律楚材は政策通であり、有能な官僚であり、確固とした思想を実現する力を持っており、文明を畏敬するインテリゲンティだったのだ。

これは「人倫」のためにやったのだということを耶律楚材はいつている。当時、人倫というのは、人類すべてという意味だった。漢民族やモンゴル民族とかの区別ではなく、人間のために私はやっているのだという意味であった。耶律楚材の持っていた正義は、人民の安寧や、人民の幸福ということが主題であったのだろう。

西夏の人で常八欣という高名な弓造りの名人が「国家はまさに武を用いている。耶律なんぞという儒者がなんの役に立つのか」と攻撃したら、彼は「弓を使おうとすれば、弓匠が必要であろう。天下を治めようとするならば、天下を治める匠が必要ではないか」と常をギャフンといわせたのである。

当時、シルクロードはこの頃が一番安全だった。モンゴルの軍が各地にいて、警備していたからであるが、チンギスハーンの息子たちが後継者問題で争いになってからだという。しかし、その安全な時代を後世の歴史家は「パックス・タターリカ」といつている。タターリカというのは韃靼人（だつたん）、つまりモンゴル人によって保たれた世界的な平和と

いう意味である。当時の世界侵略に成功したモンゴルによって、人類の文明が始まったという岡田英功氏夫妻もいるくらいだから。

話は違うが、当時、世界各地を領土としたモンゴルは、連日、各地からの情報を得、指令を伝える必要があった。当然、情報を伝える道を整備することが重要な国家的事業だった。決まった距離に馬車を休め、馬を交替させ、使者の食料や馬の飼葉あるいは馬車の修理などの駅が必要であった。「駅」という文字は、そのまま定まった距離（尺）に馬を止めるとある。日本でも、殿が殿中で吉良上野介に斬りかかって、身は切腹、お家は断絶、という重大事を早馬で赤穂に伝える東海道にも、駅（常宿）があった。東海道五十三次である。私は、日本特有のスポーツといわれる「駅伝」は、モンゴルが発祥の地ではないかと思っている。無論、相撲も、であるが。

モンゴル出身の相撲取りに旭鷲山がいる。2001年の夏場所が終わった時点では、朝青龍が切れ味の良い相撲を取っている。その旭鷲山の中学時代の同級生という女性の友人がいる。私がモンゴルを訪ねたときの現役学生で日本語を勉強しているガイドさんだ。彼女の父親はモンゴル相撲の最高位である大関だそうである。『地球の歩き方』モンゴル編のグラフィアページに写真が出ている、あの相撲取りがそうである。

ともあれ、モンゴルはいわば中国のよどんだ水を攪拌する役割を担っていた。中国には非漢民族の王朝が繰り返し現れた。その非漢民族の新しい血が注ぎ込まれて、退廃し死滅する中国を救ったといわれる。伝統的中國からは異質な時代だったろうが、それだけに歴史の教訓の豊富な時代といえるのではないか。「歴史に学ぶ」ということは、「それと同じ過ちを繰り返さない」ということであろう。

民主化後のモンゴル・ウランバートル

モンゴルの首都はご承知のようにウランバートルである。私がはじめてウランバートルを訪れたのは、北京から国際列車で向かったときである。北京から列車が出ると間もなく万里の長城が見える。そこからは漠北の地をひたすら西に向かう。国境を越え一晩眠ると、やがて終点のウランバートルがみえてくるが、すでにそこはゴビ灘の真っ只中。ゴビ灘の中にわずかにウランバートルの街があり、小さなその街を出ると、また、同じゴビ灘である。黒いといっても言い過ぎではないほどの蒼い空。日本の緑の濃さより十倍もあるのではないかと思えるほどの緑と白い建物の街。ウランバートルという言葉は「赤い英雄」という意味である。ロシア革命のあと、1924年に世界で2番目に誕生した「社会主義国」にふさわしい名前をとということにつけられた。しかし、実際はソ連の植民地的衛星国であった。だからチンギスハーンがロシアを侵略した事実を許さなかった。だから長い間、チンギスハーンを英雄視することは不可能だった。

モンゴル全体でもそうだが、この街も人影が少ない。日本の、東京の雑踏と喧騒のなかで育った私にとっては、なんだか“物足りない”感じのする雰囲気だが、これくらいの人

口のほうが、人が住むには手ごろなのだろう。時の流れが止まっているような、そして悠長に人々が住んでいる。考えてみれば、いまどき日本で「悠長に・・・」などという言葉は軽蔑に近い意味が込められているようだが、本来の意味は、いい言葉なのだ。このウランバートルでもっとも忙しそうにからだを動かしているのが、私たち旅行者である。ウランバートルの悠長を踏みにじっているようで、申し訳ないと思う。

しかし、このウランバートルも90年代に入ると一気に激変が襲った。ソ連・東欧諸国の政治的激変、そしてソ連の崩壊という動きに即応して、90年に一党独裁を放棄し、91年には市場経済の導入、92年には社会主義を放棄して国の名前までをも変えてしまったのである。

しかも、ほかの国とちがってこの国は流血の惨事なくしての変革であった。当時、民主化運動の過程で国民の多くが「国が分裂しては大国の餌食になる」という点だけでは一致していたとのことである。清朝の二百数十年に及ぶ植民地支配、70年間の社会主義的なソ連からの抑圧のなかで熟成された教訓でもあろう。しかも、それは大草原で生きる遊牧民のしたたかな自国防衛の手段だったのだろう。

だが、市場経済の方法も手続きも知らなかったモンゴルは外国資本の侵入と経済混乱が相次いだ。中国との国境が4000キロにも及ぶこの国で、中華料理店が1軒もなかったこの国に、その種の店が一気に急増した。30万人のウランバートルの人口が国全体の人口の3分の1にあたる80万人が集中した。

モンゴルの人びとにとっては、これは大変な変化だったようである。遊牧民がスーツを着て、片手に携帯電話でウランバートルの街を歩きまわるのだから。失業者が増え、貧富の差が拡大し、犯罪も増え、子どもたちの路上生活者も増えた。

モンゴルとウランバートルはまだ、生まれ変わる途中なのだろう。民主化するときみせた、遊牧民としてのあの粘り強さは必ず新生モンゴルを生み出すだろう。いまは、産みの苦しみのときなのだろう。

しかもそういう都市生活をしている彼らの幸福は、社会主義国時代に制度としてできたバカンスを楽しむことは、草原のゲルにもどって過ごすことだという。